

特別展「2019年の自然遊学館の出来事」報告

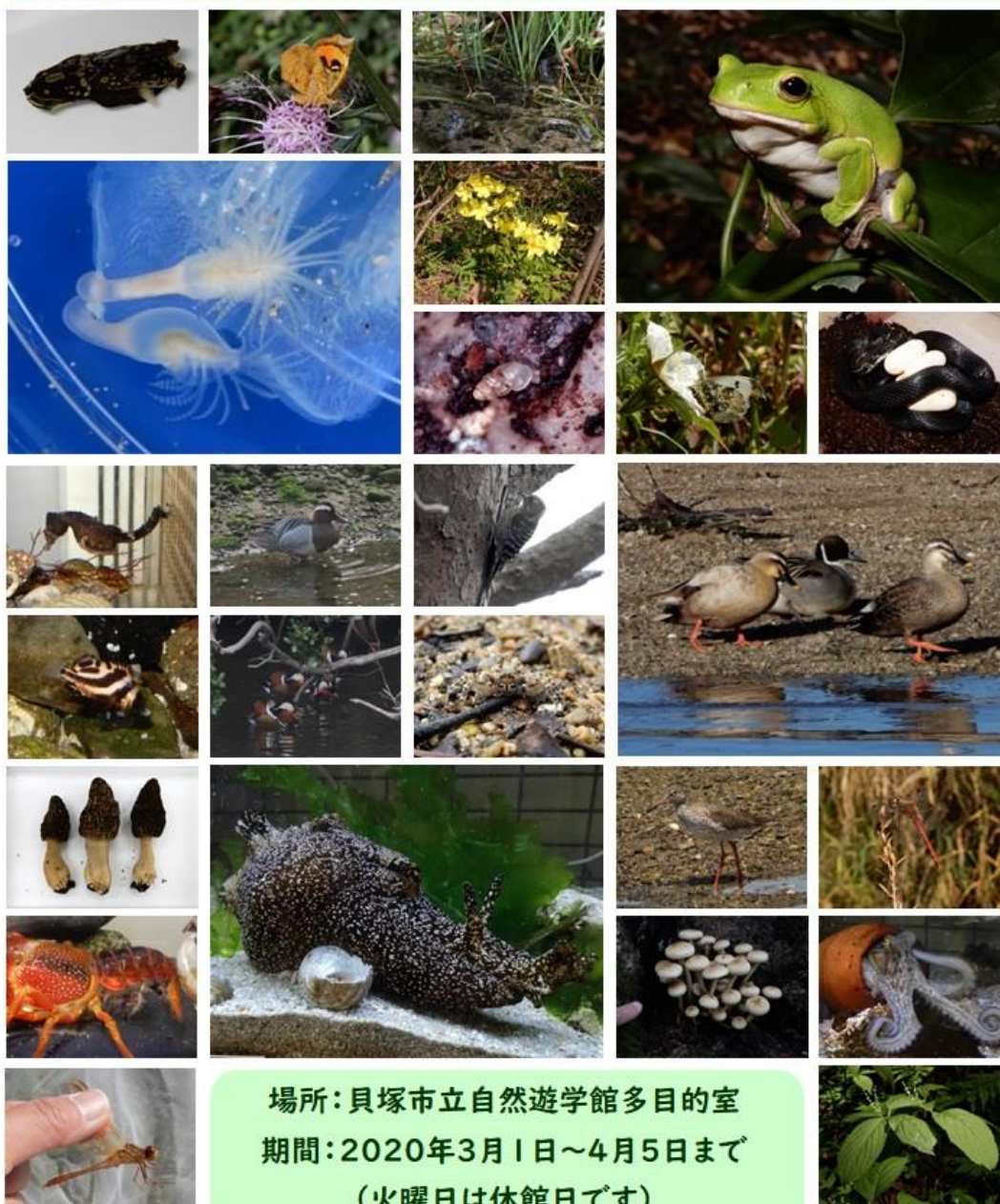
場所：貝塚市立自然遊学館多目的室

期間：2020年3月1日～4月5日

3月2日～4月5日まで、新型コロナウイルス（Covid-19）の感染拡大防止のため、18歳以下の方の入館を制限したこと、および3月26日～4月5日まで、館内常設展示のメンテナンス等のために入館制限を行い、ご迷惑をお掛けしたことをお詫び致します。

特別展「2019年の自然遊学館の出来事」

～ 写真や生物画で振り返る2019年の自然遊学館の行事と貝塚市の自然～



開催に当たって

2018年の秋に台風被害を受けた当館のプレハブ倉庫や周辺の倒木樹木などの処理も1年の間に復旧が進みました。2019年は大きな台風の直撃もなく、無事に過ごすことができました。

さて、本題に入ります。当館の主な事業は、調査・研究事業、展示・普及事業、維持・管理事業の3つです。これらの事業には、出前授業や各事業所、教育機関から依頼を受けて行う観察会への講師派遣、さらに、各学校からの団体見学や職場体験の受け入れが含まれています。出前授業は幼稚園から地域の町会まで幅広い団体からの依頼があり、団体見学では市内各学校に加え、市外・府外からの団体も訪れるようになりました。

これからも、当館は多くの皆様から親しまれ、楽しく来館してもらえる施設づくりに励んでいきます。自然遊学館には、自然に親しみ、自然を大切にする心を育てる仕掛けがたくさんあります。今後とも来館された皆様がゆっくり見学していただけるよう努めてまいります。どうぞ、ゆっくりご覧ください。

最後に、『自然遊学館の出来事展』開催に際し、多くの皆様にご協力いただきましたこと厚く御礼申し上げます。

2020年3月1日
貝塚市立自然遊学館長
高橋 寛幸

展示会場の様子



展示項目

1. 写真と解説文

2019年1月から12月までの主な出来事（生きものの記録や行事など）の写真と解説
次のページ以降に、生きものの記録を掲載しました。また、2019年に自然遊学館が行った行事の報告を、1行事ごとパネルにしました。

2. 標本

2019年に貝塚市内で採集された標本（昆虫・海産動物・菌類）を展示しました。

3. 動画

2019年に撮影された貝塚市の生きもの動画19本を、大型モニター上で再生しました。

4. ボランティア調査

近木川のアユ調査、大阪湾のプランクトン調査などの結果を展示しました。

1. 写真と解説文

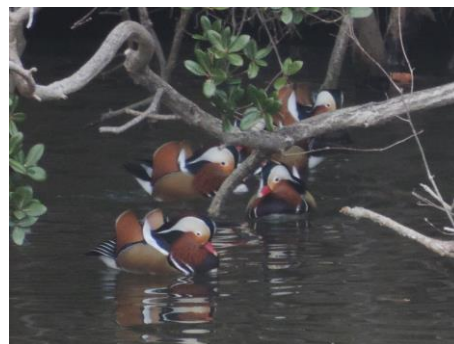
以下で紹介する生きもの写真は、すべて貝塚市内で撮影されたものです。それぞれの写真について、タイトル、撮影日、撮影場所、1行コメント、分類群、解説文、写真を示しました。

オシドリ・・・2019年1月10日、水間

いつものように隠れないのはなぜ？

カモ目 カモ科

いつもは対岸からそーっと見てもすぐに岸辺の茂みに隠れるのに、この日はなかなか隠れません。だから余裕を持って写真を撮ることができました。と言っても小さなコンデジしか持っていないので、この程度の写りですが。オスとメスで派手さがかなり違います。帰って動画を見直すと、ハシブトガラスが岸辺に近い側から追い立てていることが分かりました。



オシドリ

ゴマダラチョウの幼虫・・・2019年1月24日、千石荘

やった！ それとも残念？

チョウ目 タテハチョウ科

冬の虫屋の楽しみの一つに、エノキの幹の根元に落ちた枯葉を裏返す採集があります。目当てはオオムラサキの幼虫です。オオムラサキの幼虫には背中に4対の突起があるのに対して、ゴマダラチョウの幼虫の背中には3対の突起があります。両種とも幼虫はエノキの葉を食べます。オオムラサキがいる場所では、3対の幼虫だとがっかりですが、ゴマダラチョウさえ少ない場所だと嬉しくなります。



ゴマダラチョウの幼虫

ニホンケシガイ・・・2019年1月30日、蕎原

初記録の絶滅危惧カタツムリ

基眼目 ケシガイ科

カタツムリ行事の下見で児嶋格先生が見つけた微小貝です。貝塚市内で初記録となりました。スギの葉が堆積した場所で見つけたそうです。スギの落葉の隙間に空間ができ、微小貝にとって大切な湿度が保たれ、隠れ場所になっているのだと考えられます。2月2日の行事本番でも、参加者の方が採集しました。大阪府レッドリストでは、絶滅危惧Ⅰ類に指定されています。



ニホンケシガイ
(撮影：児嶋 格さん)

オオキバナカタバミ・・・2019年2月13日、近木川河口

大きすぎるカタバミは外来種

カタバミ目 カタバミ科

南アフリカ原産の外来種で、観賞用に持ち込まれたものです。世界の温帯地域で分布を広げています。在来のカタバミよりも花は大型です。花がない時でも、葉の表面に紫褐色の斑点があるので、他のカタバミと見分けることができます。球根（鱗茎）によって増えるのは、タマネギ、チューリップ、ユリ、ヒガンバナなどと同じです。受粉で実ができることもなく、地下茎で増えることもないそうです。



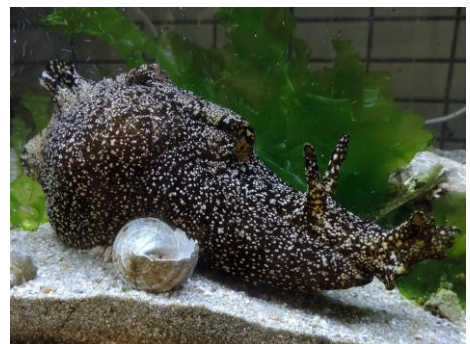
オオキバナカタバミ

アメフラシ・・・2019年2月21日、二色の浜・打ち上げ

立派な体でも寿命は1年

後鰓目 アメフラシ科

川口博さんが二色の浜で連日、打ち上げ個体を拾って、寄贈してくれました。これだけ多くのアメフラシが打ち上げられたのは、自然遊学館ができてから初めてのことです。海水槽に入れると大きくて迫力がありました。体長60cmほどの大きさですが、寿命は1年で、春に死んでしまいます。よく見ると触角の付け根にかわいい小さな眼があります。この特徴は、サザエのような蓋のある貝と同じです。



アメフラシ

ヌートリア・・・2019年3月14日、二色の浜・打ち上げ
泳ぎが上手な外来ネズミ

ネズミ目 ニュートリア科

川口博さんが打ち上げ死体を見つけてくれました。二色の浜では2012年1月の打ち上げ死体が最初の記録でした。南アメリカ原産で、世界各地に毛皮をとるために持ち込まれたものです。後ろ足に水かきがあり、泳ぎが上手です。水生植物や淡水貝が主食ですが、農作物を荒らすこともあり、特定外来生物に指定されています。



ヌートリア・打ち上げ死体

シマアジ・・・2019年3月20日、近木川河口

珍客、アジと言っても魚ではないよ

カモ目 カモ科

旅鳥。春、北に渡る途中に、1羽だけ近木川河口に寄ってくれました。コガモと同じくらいの大きさで、オスは目の上の白い眉斑が目立ちます。この日は10数羽のヒドリガモと混じって、岸辺の藻などを食べていました。これまで自然遊学館の記録にはなく、貝塚市で確認された鳥類の195種目となりました。翌日には旅立ったようです。(藤村雅志さんに近木川河口への飛来を教えてくださいました)



シマアジ

ツマキチョウ 2019年4月9日、千石荘

早春に行かなかったせい？

チョウ目 シロチョウ科

早春だけ成虫が現れるチョウで、この日はクサイチゴの白い花で吸蜜していました。オスの前翅の先が黄色いことが和名の由来です。千石荘の昆虫調査では、2011年以来、8年ぶりの確認となりました。でも、これまで4月中旬に調査を行っていたことが、未確認の原因だったかもしれません。幼虫の餌植物の中で、千石荘周辺に多いのはタネツケバナです。



ツマキチョウ

アカアシシギ・・・2019年4月16日、近木川河口

またまた近木川に珍客

チドリ目 シギ科

脚が赤いことが和名の由来である旅鳥です。旅鳥は、春に北へ向かう途中と、秋に南へ向かう途中で立ち寄る鳥のことです。貝塚産鳥類リストで、196種目の記録となりました。これも藤村雅志さんが寄せてくださった情報です。動物食で、撮影中もさかんに河口の岸辺で泥砂をつついてカニをほじくり出して食べていました。



アカアシシギ
(撮影：藤村雅志さん)

トウゴロウイワシ・・・2019年5月19日、近木川河口

見た目はイワシに似ているけれど

トウゴロウイワシ目 トウゴロウイワシ科

近木川河口での「渚の生きもの」観察会でミニ地曳網を行った際、11匹が網にかかりました。見た目はイワシに似ていて、和名にもイワシと付いていますが、分類的には食卓でお馴染みのイワシ類とは大きく離れています。体形が円筒形なことや、背ビレが2つあるなど、むしろボラの仲間に近いです。でも、ウロコが硬いことから、あまり食用とされないようです。



トウゴロウイワシ

フタリシズカ・・・2019年5月30日、蕎原

能楽の曲名に由来する和名

センリョウ目 センリョウ科

山地のやや暗い所に生え、春に茎先の穂状花序に白い花を付けます。この穂状花序はふつう2本ですが、1本や3本のこともあります。今回はちょうど咲いた時期に行くことができました。貝塚市内では馬場周辺から和泉葛城山の山頂付近まで見られます。静御前の霊が舞う能楽曲「二人静」から、和名が付けられたそうです。貝塚市内では、昨年で紹介した同属のヒトリシズカの方が、分布が限られています。



フタリシズカ

コメツキガニ・・・2019年6月10日、近木川河口

見える人にしか見えないかも

十脚目 スナガニ科

甲幅が1cm程度の小さなカニで、砂地と似た体色をしていて、逃げ足も速いので、なかなか「居る」ことを認識できません。近づくと逃げてしまうので、巣穴近くにデジカメをセットして撮影しました。別に撮った動画を見ると、砂団子を口元で大きくしながら有機物を漉し取って食べる様子や、オスがウェービングする様子が、どこかユーモラスでした。



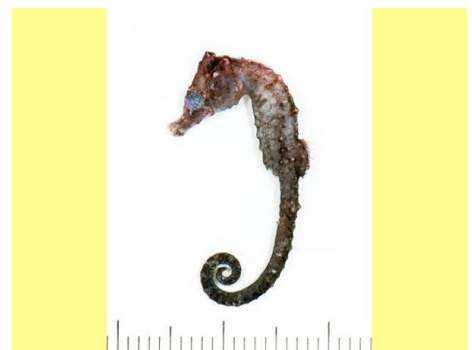
コメツキガニ

サンゴタツ・・・2019年7月14日、二色の浜

4種目のヨウジウオ発見

トゲウオ目 ヨウジウオ科

二色の浜でのアマモ場観察会の際に採集されました。サンゴタツはタツノオトシゴの仲間で、メスがオスのお腹の育児嚢（いくじのう）に産卵し、オスが全長6ミリの稚魚を出産します。サンゴと名前にありますが、生息しているのは主にアマモ場です。ストローのような口でプランクトンやヨコエビなどを吸い込んで食べます。貝塚市の海では4種目のヨウジウオの発見となりました。



サンゴタツ

サツマシジミ・・・2019年7月30日、蕎原

久々の確認、餌植物はガマズミ

チョウ目 シジミチョウ科

前翅の表面中央に白色部があることで、ルリシジミなどで見分けることができますが、裏面しか撮影できませんでした。自然遊学館の記録では、1994年の蕎原、1995年の千石荘以来の確認となりました。でも、大阪府レッドリストの指定種ではありません。自然遊学館の調査が不十分だったということでしょう。いくつかある餌植物の中で蕎原周辺や千石荘で確認されているのはガマズミです。



サツマシジミ

カラスヘビの産卵・・・2019年8月10日、自然遊学館

見るからに気が荒らそう

有鱗目 ナミヘビ科

シマヘビの黒化型をカラスヘビといいます。虹彩（黒目の周り）も舌も黒色です。頭部の下に白色の部分が少しあるだけです。シマヘビ自体も気が荒い方ですが、カラスヘビはより気性が荒いと言われています。7月26日に奥田大介さんが犬鳴で採集したものを飼育していると、8月10日に6個の卵を産みました。一部は途中まで発育していたのですが、残念ながら孵化しませんでした。



カラスヘビ（シマヘビの黒化型）

ベニイトトンボ・・・2019年8月22日、馬場

次の産卵場所を決めるのはどっち？

トンボ目 イトトンボ科

馬場の小さな池で、数ペアが産卵していました。メスが植物の茎の中などに産卵している間、オスがまっすぐ突っ立っているのは、イトトンボ類に見られる行動で、周囲を警戒しているのだと言われています。気になるのは、メスがその場所で産卵を終えて、次の場所に移動する時に、飛翔するメスが場所を決める決定権を100%持っているのか、オスには全く決定権がないのかということです。



ベニイトトンボ

シュレーゲルアオガエル・・・2019年9月18日、蕎原

お腹のぶよぶよが可愛らしい

無尾目 アオガエル科

近木川上流での西小学校5年の現地学習会に参加した時に、生徒の一人がこのカエルを見つけてくれました。メスで体長55mmは、このカエルでは最大サイズです。黒目の周りの黄色（虹彩）が特徴です。お腹のぶよぶよが可愛らしく感じます。これまで貝塚市内では、大川、木積、和泉葛城山の山頂での確認はありましたが、なぜか近木川上流域での確認はありませんでした。



シュレーゲルアオガエル

イカリモンガ・・・2019年10月10日、和泉葛城山

チョウのように振る舞う

チョウ目 イカリモンガ科

ヨシノアザミの花から吸蜜しているのを見た時、口吻がとがっているのので、テングチョウかと間違えてしまいました。ガの仲間なのに昼行性で、翅を閉じて止まります。触角もチョウ類と同じく、こん棒状です。翅の表側のイカリ形をした模様を撮影したかったのですが、なぜか翅をかたくなに閉じたままでした。幼虫の餌植物は、シダの仲間のイノデです。



イカリモンガ

オオキトンボ・・・2019年10月15日、千石荘

珍しく予感的中

トンボ目 トンボ科

台風の通過によって、ふだんは見る事が出来ない昆虫が飛ばされて来ることがあります。それを狙って台風19号の通過後に千石荘に行きました。池のほとりで「ショウジョウトンボかな」と思って網を振ったら、なにか違う感じのものが採集でき、帰って調べると、これまで自然遊学館に標本がなかったオオキトンボでした。近隣では岸和田市のある池が生息地として知られています。



オオキトンボ

クラゲエボシ・・・2019年11月2日、二色の浜・打ち上げ

クラゲの傘がすみ場所

有柄目 エボシガイ科

二色の浜に打ち上げられたユウレイクラゲの傘の縁に、何やらゆらゆらとうごめくものが19個付着していました。触手なのか脚なのか、ぱっと見ただけでは分かりませんでした。よく調べると、蔓脚類というフジツボも含まれるグループに属する節足動物の仲間であることが分かりました。ということは触手ではなく脚です。この脚を動かして、海水中のプランクトンを摂食するそうです。



クラゲエボシ

カラスキセワタ・・・2019年11月4日、二色の浜・打上げ
触角がないけどウミウシの仲間です

川口博さんが打ち上げ生体を採集してくれました。児嶋格先生に聞いても、「二色の浜でこんなものは見たことがなかった」そうです。色彩は黒紫色が基調で、青色や黄色の斑紋には種内変異があるようです。内湾のアマモ場に生息し、他の貝類やウミウシの仲間を丸のみして摂食します。後端付近から突き出していたものは鰓で、きしわだ自然資料館の柏尾翔さんに教えていただきました。



カラスキセワタ

アキアカネ・・・2019年11月17日、自然生態園

少し増えてきたかな？

トンボ目 トンボ科

一時期、アキアカネを含むアカネの仲間がすごく減った時期がありました。一般的には、ネオニコチノイド系の農薬が原因だと言われています。貝塚市でも2010年前後にすごく減り、最近はずかしながら増えているようです。自然生態園「トンボの池」でも徐々に観察され、千石荘でも1日の調査で8個体見られました。ネオニコチノイド系の農薬の害が知れわたり、使用が控えられたのかもしれませんが。



アキアカネ

コゲラ・・・2019年11月26日、和泉葛城山

無駄な突きはない？

キツツキ目 キツツキ科

コゲラは一番よく見かけるキツツキです。この日は山頂のアカマツの立ち枯れ木を盛んに突いていました。こちらに気づかず、ひたすら突くという感じです。写真を撮って、動画も撮っても、まったく逃げません。その動画を見ると、おそらく甲虫の幼虫をすすり出している瞬間が写っていました。当てずっぽではなく、この幼虫がいるのが分かって、穴のまわりを突いているように見えました。



コゲラ

カルガモのバフ変・・・2019年12月9日、近木川河口

バフ変って何語？

カモ目 カモ科

藤村雅志さんから、カルガモの「バフ変」が河口にいることを教えてもらいました。でも、バフ変という言葉が知らなかったのので、館に戻ってから調べ、色彩変異のことだと分かりました。バフ色という色があることも、後で知りました。この個体は、上嘴の先の黒斑が根元に向けて広がっているのので、マガモとの交雑個体である可能性が高いことも、藤村さんに教えてもらいました。



カルガモのバフ変（左）

ドングリの森の黄葉・・・2019年12月13日、自然生態園

木々が笑っているよう

貝塚市の雑木林をモデルにして21年前につくられた自然生態園「ドングリの森」の黄葉です。水間公園で拾ったドングリを苗にして植えたのがスタートでした。クヌギ・コナラ・アベマキ・ウバメガシなどがあります。黄葉の時期の朝、東からの朝陽を浴びると、木々が笑っているように見えます。もっとも”山笑う”は、春の季語で、秋の季語は”山装う”“だそうです。



ドングリの森の黄葉

2. 標本

2019年に貝塚市内で採集されたネアカヨシヤンマ、オオキトンボ、ピックオビハナノミ、ヤツボシハナカミキリ、フタガタハラブトハナアブ、ウスアオリングなどの昆虫標本、ヒメホウキムシ、クラゲエボシなどの海産動物の標本、およびトガリアミガサガケの標本や菌類の図版を展示しました。

なお、これらの標本に関しては、第15回生きもの切り絵展（4月12日～5月10日、於：自然遊学館多目的室）において、引き続き展示しました。



トガリアミガサガケ
(貝塚市蕎原、2019年3月26日)
(寄贈：廣野光子)

3. モニターに映した動画

2019年に貝塚市内で撮影した動画19本を大型モニターに映しました。19本のリストを以下の表に示しました。

モニターに映した動画のリスト（2019年展）

番号	月	日	タイトル	場所	時間(分)
1	2月	21日	アメフラシ	二色の浜・打上げ	1:40
2	3月	20日	シマアジ	近木川河口	1:18
3	4月	19日	ジムグリ	自然遊学館	0:33
4	4月	27日	モクズガニ	自然遊学館	0:35
5	5月	21日	チュウシャクシギ	近木川河口	0:22
6	5月	27日	アマガエル	自然遊学館	0:37
7	6月	10日	コメツキガニ	近木川河口	2:42
8	6月	24日	コトヒキ	自然遊学館	0:50
9	6月	25日	ハナアブ科の幼虫	木積	0:28
10	6月	30日	ウシガエル	自然遊学館	0:35
11	7月	24日	ニホントカゲ	自然遊学館	0:26
12	8月	14日	ヤブキリ	自然遊学館	0:18
13	8月	22日	ベニイトンボ	馬場	0:58
14	8月	30日	ボウズハゼ	自然遊学館	0:23
15	9月	19日	チャイロマルハタ	自然遊学館	0:24
16	9月	24日	アナゴ	自然遊学館	0:47
17	10月	17日	カジカガエル幼体	秋山川	0:31
18	11月	2日	クラゲエボシ	二色の浜・打上げ	0:39
19	12月	23日	ウミケムシ	自然遊学館	0:30

4. ボランティア調査

「海とつながる山」というテーマで取り組んだ、近木川のアユ調査、ホテルの寝床調査、大阪湾のプランクトン調査など、市民ボランティアを募集して行った調査の様子や結果を展示しました。



近木川のアユ調査



ホテルの寝床しらべ



二色の浜での調査